

コロナの時代を生きる

獨協医科大学心臓・血管外科

福田 宏嗣

Hirotsugu FUKUDA



去年は元号が「平成」から「令和」へ変わり、ラグビーワールドカップでBrave Japanの活躍に盛り上がり、そのチームスローガン「One Team」は流行語年間大賞にもなりました。その余韻を引きずりながら、今年も東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催され、世間は大いに盛り上がる予定でした。

新年明けて明るいニュースや話題の中、中国・武漢で原因不明の肺炎が流行の兆しがあると報道され始めていましたがSARS (severe acute respiratory syndrome), MERS (middle east respiratory syndrome) の際も日本はほとんど影響を受けず、今回も対岸の火事のように眺めていたのは私だけではないと思います。それが2月、3月と徐々に日本を含めた世界中へ広がっていき、2020東京オリンピック・パラリンピック競技大会の延期、全国を対象とした緊急事態宣言発令など、コロナ前とは全く異なった世界となってしまったことはご存知のとおりで、政治、経済、社会、個人の生活にも大きな影響を及ぼしています。医療業界でも、病院では新型コロナウイルス感染患者の対応に当たる一方で、不要不急の患者の入院や手術を制限せざるを得ず、病院運営や経営は多大な影響を受けています。医療従事者は感染の恐怖に怯えながら業務をこなすとともに、privateでは各種の規制が緩和され、Go to travelやGo to eatキャンペーンが始まった現在でも行動を自制し、stay homeしている状況だと思っています。私自身2ヶ月あまりの自粛生活では、自宅に籠もり本を読んだり、Amazon Primeで映画を見たり、YouTubeで動画を見ながらエクセサイズするなど生活様式も一変し、現在も続いています。学会の学術集會も集合型集會は開催できず、オンラインを中心とした開催方式で新たなwithコロナ時代の学術集會の在り方が模索されています。

しかし、「人間万事塞翁が馬」「ピンチ!!それはチャンスだ!」、悪いことばかりではありません。例えば、様々な領

域でのICT (information and communication technology) の利用です。医療の世界はICT化が遅れていると言われていましたが、やっとその一端を利用するようになりました。私達が今回のコロナ禍で始めた試みの例を挙げると、ビジネスチャットアプリによる迅速な情報共有、Microsoft Teamsによる様々なチーム間(心臓・血管外科医局、ハートセンター、VADチーム、TAVIチーム、IEチーム、院内各種委員会など)でのコミュニケーションや情報共有、ビデオ会議システムを使用した院内・院外との会議や同一法人内の循環器内科とのカンファレンスなどです。これらはビジネスの世界では当たり前かもしれませんが。大学教育でも座学はオンライン講義へ移行し、学生もオンデマンドで好きな時間に見たり何度も見直せることで評判がよく、学習効果が上がることも期待されています。実習の一部もオンラインで行い、その学習効果の検証が行われています。学術集會もWeb開催では仲間達とface to faceで集まり、親睦を深め情報交換をしたり現地の美味や観光を楽しむことはできませんが、一方で、スケジュールの関係で参加できない学会や聞けない演題もアーカイブで聴講することが可能で、最終的な参加者の増加がみられています。今後、活発な議論の仕方など更なる工夫・改善が必要ですが、新しい時代の新しい学術集會の在り方の模索が続きます。

政府が新しい未来社会のコンセプトとして「Society5.0 [サイバー空間(仮想空間)とフィジカル空間(現実空間)を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会]」を提唱して久しいですが、このコロナ禍で医療分野、特に本学会が関係する領域でも新しい試みや人工臓器への応用が進み、遠隔医療などの医療体制の構築や患者の健康増進に大きく貢献することが期待されています。

人類はペストやスペイン風邪など幾多の感染症と戦い、克服してきました。今回も世界史に残る事態だと思いますが、叡智を結集してこれを克服するとともに、New Normalが確立されることを確信しています。

本稿の著者には規定されたCOIはない。

■ 著者連絡先

獨協医科大学心臓・血管外科学講座

(〒321-0293 栃木県下都賀郡壬生町北小林880)

E-mail. fukuda-h@dokkyomed.ac.jp